

特別記事

幼児虐待への取り組みは、

育児相談よりも intervention（育児介入）が必要です

「食事与えず3歳児衰弱死…体内からはタマネギの皮やアルミ箔（2914年6月15日に餓死）」

大阪府下の痛ましい事件に多くの方が心を痛めていると思います。

亡くなった3歳児女児は、生まれながらの筋力の低下に伴う障害のある子ども（先天性ミオパチー）だったと報道されています。日常生活に多くの介助が必要だったようです。

衰弱死という母親が娘に加えた悲惨さが大きく取り上げられています。障がい幼児を育てる19歳の母親への支援が、ほとんど行われていなかったことも事件の大きな背景だと思います。だから若年母親の行為が仕方なかったという意味ではありません。ネグレクトは親のしつけ、子育てのやり方ではありません。間違いなく子どもの生存権を侵す非人道的行為です。

1990年米国エール大学ブレムナー博士が、極端なネグレクト状態で育てられた子どもと、そうでない子どもの脳の大きさを比べた写真を世界に発信しました。幼児期にネグレクトを受けた子どもの脳は、萎縮しているという衝撃的な発表でした。

しかし、ネグレクトや虐待が繰り返し引き起こされるたびに、加害者の母親、父親が世間から非難され、未熟な親、虐待親と刻印されて終わりではいけないように思います。このような考え方は一般化されていますが、これまでの心理学は、子どもが引き起こす問題や、親子間に起こる様々な問題を、子ども自身の発達上の問題であり、親の人格的な本人の問題から引き起こされると考え、相談やカウンセリングを行って来ました。

家庭支援への取り組み

幼児虐待の可能性の強い家庭への支援の取り組みを推し進めたのは、1970年代にアメリカの小児科医（オールズ）によって始められたと言われています。貧しい家庭で子どもを育てる母親や、虐待の危険性のある家庭に訓練を受けた看護師が毎月二回訪問し、育児方法を観察し助言を与えるプログラムが、15年間に渡ってニューヨーク州やテネシー州で行われました。

このプログラムの効果を測定するために、虐待の危険性のある家庭を介入するグループと何もしないグループに分けられました。

大きな成果が上がったそうです。子どもへの虐待、アルコールや薬物依存が四分の一に減り、生活保護に頼る人や失業者も減りました。

その子どもたちは、実験群の何も支援をしないグループに比べて、逮捕者50%に減り、ドラッグ、アルコール、タバコ、さらに無秩序な性行為も減りました。オバマ大統領の支持により、このプログラムが2010年から10年間続ける予算が認められたそうです。プログラム進行に必要な予算は86億ドルと言う巨額なお金ですが、20年後には何百倍になって戻ってくるという考えが根底にあります。

家庭子育て支援プログラムは役に立つのか？

しかし、難しいこともあります。

家庭支援は何時の時期に、どのような方法で行えば効果が出るのかは、まだ十分に分かっていないことです。虐待による幼児の死亡が発覚するたびに、行政機関による訪問や指導が行われていたようですが、それらが効果的でなかったことも事実です。

今回の大阪府下で起こった衰弱死に対しても、児童関係機関（保険所・児童相談所等）の責任者数人が頭を並べて、平身低頭的なお辞儀をする恒例の儀式です。これに対しても、世間の人々も、公的な機関は努力していたが、気づかなかった、仕方がなかったという暗黙のメッセージで答えているような気がします。

各国で広く行われている家庭支援プログラムに疑問を持つ専門家もいます。家庭支援プログラムの結果、母親の人格に影響を与えるのは、わずか5%に過ぎず、母親の育児方法に助言を与えても、育児方法に目立った変化はないという調査結果もあるそうです。

母親が変化したのは助言ではなくて、母親の社会的、経済的状況が改善され、母親自身の問題解決能力が改善したから、と判断されています。

intervention（介入）の研究が必要です

このような考え方に対して、子どもや親子間に起こる問題を、親子を取り巻く人々や環境との相互関係から引き起こされる、と考える生態学的心理学の研究が進み、発達のなゆがみのある幼児への支援や、虐待の可能性のある親への迅速な効果的な介入方法の研究が行われています。

また、社会脳と言う新しい脳研究は、相手の視線から相手が考えていることや行動を読み取る能力や人の顔の違いを認識する能力が、脳のどの部位で行われているのかを見つけました。脳それ自体がすべてを把握し理解するのではなくて、それぞれの脳の部位が関連し合って相手の考えていることを理解するのです。虐待行為や女性へのレイプ事件の加害者は共感性と言う高度な感情能力の希薄さが分かって来ました。共感性の生み出す脳の部位も分かって来ました。さらに、遺伝子研究においても、遺伝子それ自体で何かができるのではなくて、遺伝子と遺伝子の相互依存関係から起こることも分かって来ました。

これまでの脳の研究は、脳は中央の指令系統から命じられる信号で働くと考えられ、脳は破損すれば回復不可だと思われていました。また、遺伝子＝宿命論的な考えが支配的で

したが、近年は脳や遺伝子は置かれた環境との相互依存的な関係で変化して行くことも分かって来ました。

「介入」とは、虐待の危険性のある家庭を訪問して、母親の相談に耳を傾け、育児方法を助言すると言う意味ではなくて、虐待の可能性のある母親の置かれている生活環境や他者関係を観察し、異なった環境や他者関係を提供する方法です。

母と子の遺伝子の「エピジェネティクス」

虐待やネグレクトは母親の養育態度の欠如に目を向けるのではなくて、母と子どもの遺伝子のギャップに気づいている専門家もいます。子どもの遺伝子の結びつきは、父から23個母から23個受け継ぎますが、23と23の結びつきは天文学的な偶然性で結びつくゆえに、個々の内面的な成り立ちに同じものは二つとしてありません。しかも、一度与えられた遺伝子は生涯変化するのではなくて、遺伝子は環境との働きで独自の変化をする「エピジェネティクス」と言う学者もいます。

母親の育児方法ではなくて、母親に子ども（遺伝子）が望んでいることを理解するように指導するのです。母の遺伝子が危険な方向に向かえば、遺伝子自体が不適応を起こし遺伝子のマイナスの「エピジェネティクス」が虐待行為を生み出すと考えられています。

それゆえに母親のストレスを軽減させ、或いは脳に快楽的な刺激を与えるオキシトシンホルモンの投薬によって、母親の虐待的な性向を断ち切ろうとする介入も研究されています。

可塑性遺伝子という発想

保育園・幼稚園・学校現場からこのような話が續出しています。

「精神的に不安定で感情を抑えられない児童が目立つ」。大阪市立小のベテラン男性教諭（60）は現状をそう明かす。反抗的な態度を見せ、ささいなことで教室を飛び出したり、突然壁を殴ったり。」

「手を何度も洗う、光を見ると手をかざしている、手に砂が付くだけで泣き騒ぐ、きつい音には耳をふさぐ、匂いを嗅ぐ等の子どもを、発達障がいスペクトラム（連続体）と考えられていますが、なぜ、このような行為にこだわるのか？」

「何をするにしてもいつも一番先でないと怒り出す子どもが目につきます。また、自分が望んでいることがかなえられない時は、クラスの気に入らない子どもを名指して、〇〇くんが悪いと泣き叫びます。」

アメリカの学者たちも、近年、環境や他者関係に強く反応する子どもがいます。彼らは、快楽的、癒しのオキシトシンやドーバミンに影響する神経伝達物質の遺伝子が、特定の形をした「札付きの遺伝子」を持っているそうです。彼らの行動は、彼らの生育環境と脳の遺伝子が危険な関係で続いていた結果とも考えられ「虚弱性遺伝子」と呼ばれていたそうです。

環境に過敏に反応する遺伝子を持つ子どもを、悪環境から理想的な環境に生活を変化させることで、彼らは逆に社会的能力やIQも向上する「可塑性遺伝子」を持った子どもだと考えられています。

遺伝子や脳の研究に新たな光が与えられることで、個性的な子どもの生き方が広がって行くことは確かです。

参考文献：双子の遺伝子 テイム・スペクター著（野中 香方子訳） ダイヤモンド社
自閉症スペクトラムとは何か？ 千住 淳著 ちくま書房
社会脳の発達 千住 淳著 東京大学出版会
人間発達の生態学 ブロンフェンブレンナー著 磯貝・福富訳 川島書店